

鴨長明「すき観」の一考察

杉本 亜由美

一. はじめに

「すき」という言葉にはいくつかの意味があり、時代とともに捉え方が変化してきた。「すき」という言葉自体は奈良時代にはまだ表れておらず、平安時代あたりから表れてきたようである¹⁾。その後、「すき」に「数奇(奇)」という漢字があてられ、院政期の歌論書『袋草紙』や『宇治拾遺物語』には和歌や管絃に情熱を燃やす者を「すきもの」とする逸話が見られる。『袋草紙』(上巻)では、「加久夜の長の帯刀、節信は数奇者なり。」とし、「すきもの」節信が能因と初めて会った時、能因は歌枕で名高い長柄橋造宮の時の鮑屑を出し、節信は同じく歌枕で名高い井手の蛙の干からびたものを出してお互いに称賛して別れたという話がある。編者の清輔はこの逸話の最後で「今の世の人、嗚呼と称すべきや。」と評している。「今の世の人」は長柄橋や井手の蛙が歌枕で名高いということはもちろん知っていたのであろうが、節信や能因の行為は常軌を逸する行為だとして「嗚呼」と表現したのである。また、『宇治拾遺物語』(巻十五―五)の説話には、源通清を風流人であり「かゝるすき者なれば」とし、通清が花見に行く

途中の破車の中で人違いをして閑白に失礼な態度をとってしまった、通清は閑白の護衛に破車の簾を切り落とされてしまったという話があり、この説話の最後は「すきぬるものは、すこしをこにもありけるにや。」と締めくくられている。『宇治拾遺物語』においても「すきもの」が「少し常軌を逸した行動をとる者」と表現されており、『袋草紙』と同様に「すき」を良い意味には捉えていない。

「すき」の意味合いは『袋草紙』や『宇治拾遺物語』から長明の『無名抄』にかけて捉え方が変わっており、長明の「すき観」は『袋草紙』や『宇治拾遺物語』とは違った意味合いで捉えられているのである。長明は純粹に「すき」を良いものと理解し解釈し、自身の著書『無名抄』の中でそれらを表現しているのだが、長明ほど「すき」を純粹に良いものと解釈して表現した者はいないのではないか。

長明は『無名抄』の中で「すき」について、和歌を愛するが故に和歌に関連する知識を得るためならば、どんなことがあっても実際に現地へ赴くという姿勢のことだと述べている。本論においては、長明が現地へ赴く姿勢が大切であると述べている章段に注目し、こ

これらの章段の流れが長明の表現する「すき」につながっていることを確認しながら、長明の意味する「すき」はそれまでの「すき」解釈とは意味が違うことを考察したい。

二. 『無名抄』における「すき」

『無名抄』で長明は五つの章段(16・17・28・80・81)において「すき」ということばを用いている。以下にそれらを考察したい。なお、特に断りがない限り、『無名抄』の引用文はすべて(『鴨長明全集(梅沢本)』貴重本刊行会 二〇〇〇年)による。また、梅沢本に章段毎の番号はないが、便宜上、久保田淳訳注『無名抄』(角川ソフィア文庫、二〇一三年)に拠って章段毎に番号を付した。

16 「マスホノス、キ」の「すき」表現
いみじかりけるすき物なりかし

章段前半は、「マスホノス、キ」という歌語に関心を寄せていた登蓮が、その実態を知る人間の存在を知るやいなや、「としごろいぶかしくおもひ給へし事をしれる人ありときゝて、いかでかたづねにまからざらむ」と言つて、「あめやめていで給へ」という周囲の制止も聞かずに、雨の中を京都から摂津渡辺まで急いで行つたというものである。それに対して長明は「いみじかりけるすき物なりかし」と評している。後半では、登蓮が譲り受けた「マスホノス、キ」の内容を長明自身が第三代目の伝承者として受け継ぎ、「みだりにとくべ

からず」としてここに記している。その後、長明は「マスホノス、キ」を用いて三首の和歌を詠んでいる。鎌倉時代後期の私撰和歌集である『夫木和歌抄』には、次の長明作の和歌を三首挙げて、これを「伊勢記」のものとしている。

鴨長明

四四二〇 目をへつといとどますほの花すき袂ゆたげに人ま
ねくらし

四四二一 しろたへのますほの糸をくりさらしまがきにさぼす
はなのをすすき

四四二二 秋ふるす霜より後のきくの色をかねてますほのをば
なにぞみる

此三首歌伊勢記云、ゆきつきてみればかしこを二見里と云云さるほどなる板屋のをかしげにすみなせるに、いろいろのせんざいどもさかり過ぎたれど、よしある人のあたりとみえたり、時雨などいふばかりにはあらで、はれまなかりければ、いたづらにこもりゐたる、なぐさめがてら、せんざいなる花の色色ひとふさづつとりならべて見るついでに、三種のすすきといふこと人の語りしをおもひいでて、心みによめると云云²⁾

長明が歌語「マスホノス、キ」に関する知識を譲り受け、その後三首の和歌を詠んだということは、歌語「マスホノス、キ」に対する長明のこだわり、そして、それを聞きあてた登蓮への尊敬や憧れの念が浮かび上がる。歌語「マスホノス、キ」を用いた和歌はこれまでに十五首程度あり、その内、三首が長明の詠んだ和歌である。

17 「キデノ山ブキ并カワツ」の「すき」表現

人のすきとなさけは年月をそへておとろへゆくゆへなり

章段前半は、「ある人」が井手の地に赴いた際に土地の古老から聞いたという「ゐでのやまぶき」の現状と「井でのかはづ」の実態についての話が紹介される。ここで、長明が用いた表現を見ても井手に立ち並んで置かれている石積み長さの「十余丁ばかり」など、実際に現地へ赴いて確認したのかと思われる程の正確な数値を使った詳細な表現が見てとれ、長明はよほどここへ行きたかった、もしくは自分へ行くべきだとある種の使命のようなものを感じていたのでないかと想像できる。後半で長明は、この話を「心にしみて、いみじくおぼえ」ていたのだが、三年たつても井手を訪れることはなく、「井でのかはづ」に対して興味を抱いた自らの思いを実行に移すことができないままに終わる。それは、一つ前の章段「マスホノス、キ」にある「あめもよにいそぎいでんには、たとしへなくなん」という登蓮の実行力とは比べものにならない差異であった。そこから、後世には井手の地に赴いても「かはづ」の声を聞こうと

する人は少なくなるだろうとし、その理由を、時代が下るに従って「すきとなさけ」が衰退することに求めている。後半の「井でのかはづ」についても長明はもちろん現場に赴いてかえるの鳴き声を聞き取ったのだらうが、まだ訪れていない。「和歌を愛する者として、ああ、自分はふがない・・・」という長明の心の声が聞こえてくるようである。最後の「年月をそへておとろへゆくゆへなり」には、長明の「すき」への想いは年月が経つと共に衰える、だからこそ尊いのだという「すき」への純粋な思いや憧れが見てとれるのである。井手に行きたくて仕方がない、もしくは歌人として行くべきだと思ふのにまだ足を運んでいない・・・このことで長明は自分自身を責めているのである。このあたりは長明ほど純粋に「すき」を感じ取っていた人はいないのだと思わせる内容ではないだろうか。

『無名抄』で長明は上記の二章段の他、次の三章段で「すき」という言葉を用いているが、これらの「すき」は「和歌を愛する熱い情熱をもつもの」として表現されている。

28 「俊頼哥ラクバツウタフ事」の「すき」表現

ありがたきすき人

永縁が、琵琶法師達にいろいろな品物を与え、自作の和歌を歌わせたところ、当時の人々は永縁を「ありがたきすき人」といつてほめたという「すき」説話である。

80 「頼実ガスキノ事」の「すき」表現
いみじきすき物なり

「左衛門尉藏人頼実はいみじきすき物なり」と紹介するこの章段の「すき」は、頼実の和歌への強い情熱が、自らの命と秀歌を引き替えにする行為となったものであるとしている。

81 「業平本鳥キラル、事」の「すき」表現
すきにことよせて

髻を切られた業平が、それをもとのようにのばそうと思い、引きこもっている間に、「歌枕でも見てこよう」と「すき」を口実として東国の方へ出かけていったということである。

これら三章段については、前述の二章段に比べると「すき」という言葉についてのこだわりが多少弱いが、長明が「すき」という言葉を好意的に捉えていることは理解できる。

三、『発心集』における「すき」

長明は『無名抄』だけでなく、『発心集』でも「すき」ということばを用いている。以下にそれらを考察する。

中納言顕基、出家、籠居ノ事(第五卷一八)
イトイミジキスキニテ、朝夕琵琶ヲヒキツ、罪ナクシテ罪

ヲカウブリテ、配所ノ月ヲ見バヤトナム願ハレケル。

世の栄華を好まず出家し仏道に志した顕基が息子の身を案じて頼通に託した説話であるが、ここで顕基を朝晩ずっと琵琶を弾いて「スキ人」としている。

永秀法師、数奇ノ事(第六卷一七)

家貧テ、心スケリケル。夜昼、笛ヲ吹ヨリ外ノ事ナシ。

(中略)

実、スキモノニコソト哀ニアリガタク覚ヘテ、笛イソギ尋ツ、送リケリ。

貧しい生活をしている永秀は頼清から望みを聞かれても、漢竹で作られた笛が欲しいと言うのみで、常に笛を吹き名手になったという永秀を「スキモノ」としている。

時光・茂光、数奇及ブ天聴ニ事(第六卷一八)

数奇ハコトニタヨリトナリスベシ。

時光、茂光は帝の御使いの話を聞かずに歌い続け、その様子を聞いた帝は怒るどころか感心したとして、二人の行為を「数奇」としている。

宝日上人、詠ジテ和歌ヲ為行ト事 并蓮如、參讚州崇徳院ノ御所事（第六卷一九）

イミジカリケルスキ物ナリカシ。

宝日が和歌を詠じて修行をしていることとともに、蓮如の定子皇后の御歌を冬の夜に一晩中吟詠して皇后宮の後世を申った行為を「スキ物」としている。

『発心集』における「すき」表現は、主に和歌や管絃に対して一途に熱狂、熱中する精神を持つ者に対して「すきもの」と紹介する逸話であり、『無名抄』の後半三章段にある「すき」にあるような意味合いと同様に表現されている。そこで長明は和歌や管絃に一途に熱中する姿を、やりすぎだなどとは非難せず、好意的に捉えている。

四 『方丈記』における「すき」

『無名抄』や『発心集』に「すき」という表現が見られるのに対して、長明の代表作である『方丈記』には、この表現が見当たらない。しかしながら、長明が著作するにあたり、「すき」を全く意識していなかったとは考えにくい。歌人である長明が書いた『方丈記』が「すき」ということに対して影響を受けないはずもなく、『方丈記』においても長明の「すき観」は十分に感じ取ることができる。『方丈記』には長明が一番に重んじている実際に現地に行かないと分からない

詳細な数値表現（去安元三年四月廿八日カトヨ）「二町ヲコエツ、ウツリユク」「公卿ノ家十六ヤケタリ」「又治承四年卯月ノコロ」「三四町ヲフキマクルアヒダニ」「治承四年ミナ月ノ比」などがふんだんに見られる。中でも日野山での閑居の様子である、

イマ日野山ノラクニアトヲカクシテノチ、東ニ三尺余ノヒサシヲサシテ、シバラクブルヨスガトス。南タケノスコラシキ、ソノ西ニアカダナヲツクリ、北ニヨセテ障子ヲヘダテ、阿弥陀ノ絵像ヲ安置シ、ソバニ普賢ヲカキ、マヘニ法花経ヲ、ケリ。東ノキハニワラビノホトロラシキテ、ヨルノユカトス。西南ニ竹ノツリダナヲカマヘテ、クロキカハゴ三合ヲ、ケリ。スナハチ和哥、管絃、往生要集ゴトキノ抄物ヲイレタリ。カタハラニ琴、琵琶、ヲノ／＼一張ヲタツ。イハユルヲリ琴、ツギビワ、コレ也。カリノイホリノアリヤウカクノ事シ。

や、和歌で名高い猿丸大夫の墓への訪問部分である、

若ハ又アハヅノハラヲワケツ、セミウタノヲキナガアトヲトブラヒ、タナカミ河ヲワタリテ、サルマロマウチギミガハカヲタツヌ。

という表現からは、長明の当時の生活の様子が容易に想像され、長

明は小さな住処に身を寄せ、心の赴くままに和歌関連の名所を訪ね歩いているところから、『方丈記』の中に長明の「すき」を十分に感じることができるのである。

これら『無名抄』『発心集』『方丈記』の表現を見てみると、長明はそれまでの『袋草紙』や『宇治拾遺物語』とは違って「すき」を肯定的に捉えており、それは一種の美学に近いものとはいえないだろうか。

五・長明の登蓮観

長明の「すき」を考える場合、長明が「すきもの」として尊敬し憧れていたと思われる登蓮を無視することはできない。長明の「すき」に対する思いは『無名抄』の「マスホノス、キ」「キデノ山ブキ并カワヅ」の章段における登蓮に対する思いと一致する。長明は自らの著書にたびたび登蓮を登場させており、登蓮に対して特別な感情を持ち合わせているように見受けられる。ここで長明は登蓮にどのような感情を抱いていたのかを考察したい。

まず、登蓮について、生没年は文献が残っていないので正確な年を確定することは不可能だが、辞世の歌が寿永元(一一八二)年十一月に成立したと考えられる『月詣和歌集』に収められていることから、それ以前に没したと考えられる。勅撰集には『詞花和歌集』を初出として総計十九首入集しており、家集に『登蓮法師集』がある。

登蓮については述べられている資料が少なく、詳細については分

かりかねるが、源頼政や西行とも交際があったようである。また、『平家物語』延慶本巻四に平清盛が熊野詣の途次、秋津の里に至った際、通りすがりの登蓮と連歌の付合をして以来、その機知を愛でて扶持した話があり、さらに、登蓮はもと筑紫安楽寺の僧で、近年近江の阿弥陀寺に住持すると紹介されるが、彰考館文庫蔵『扶桑蒙求私注』には、もと比叡山の僧で下山後、青蓮院和尚御房に芸能(歌)をもつて伺候していた際に、忠盛に出会ったという異伝がある。

さらに『源三位頼政集』三二一番歌、『林葉和歌集』一一六番歌、『禪林癡葉集』八六番歌詞書に登蓮が鎮西に往き来していたことを記しており、安楽寺僧の立場から太宰府の天神説話を媒介した人物として注意すべきである。

一方、長明は久寿二(一一五五)年から建保四(一一二六)年頃の生存と考えられており、二人はお互いに、同じ時代を生きたということになる。両者が会話を交わすことが可能であったか否かは定かではないが、木村健氏⁵⁾や紙宏行氏⁶⁾によれば、登蓮、長明ともに俊恵法師の歌林苑に参加していたようである。そのあたりから歌林苑の存在が互いを結びつけていた、もしくは長明が登蓮の存在を知るときっかけになっていたとは考えられないだろうか。そのような長明と登蓮の二人の関係性のもと、長明は著書『無名抄』の中の「マスホノス、キ」「キデノ山ブキ并カワヅ」の章段や『発心集』の中の「蓮花城、入水ノ事(第三卷一八)」に登蓮を登場させ、紹介している。以下に『無名抄』『発心集』の登蓮の登場する場面を引用し、考察し

たい。

16 「マスホノス、キ」

登蓮法師そのなかにありて、この事をきゝて、ことはすくになりて、又とふこともなく、あるじに、みのかさしばし給へといひければ、あやしとおもひながら、とりいでたりけり。物がたりをもきゝさして、みのうちき、わらぐつさしはきて、いそぎいけるを、人々あやしがりて、そのゆへをとふ。わたの辺へまかるなり。としごろいぶかくおもひ給へし事をしれる人ありときゝて、いかでかたづねにまからざらむといふ。をどろきながら、さるにても、あめやめていで給へといさめけれど、いではかなき事をもの給かな。命はわれも人も、あめのはれまなどまつべき事かは。何事もいましづかにとばかりいひすてゝいにけり。いみじかりけるすき物なりかし。

17 「キデノ山ブキ并カワツ」

かの登蓮が、あめもよにいそぎいでけんには、たとしへなくなん。これをおもふに、今よりすゑさまの人は、たとひおのづからことのたよりありて、かしこにゆきのぞみたりとも、心とめてきかんとおもへる人もすくなかるべし。人のすきとなさけとは、年月をそへておとろへゆくゆへなり。

「マスホノス、キ」、「キデノ山ブキ并カワツ」の章段に関しては「すき」表現で前述したが、長明は「マスホノス、キ」の章段で、雨の日にわざわざ薄の話を聞くために、出向いていった登蓮を、自身が重んじている現地に足を運ぶ姿勢を実際に実践している人物として「いみじかりけるすき物なりかし」と紹介し、次に続く「キデノ山ブキ并カワツ」の章段でも、誰よりも現地に赴くことを重視している長明だからこそ、実際に井手に行きたいのに自分は行くことができているのであるが、登蓮は雨風をもともせず現地に赴いているというところに触れており、長明は同じ時代を生きた先輩であろう登蓮を、「かの登蓮が、あめもよにいそぎいでけんには、たとしへなくなん」というように「すきもの」として、大変尊敬し憧れていたということが見てとれる表現である。「無名抄」において「すき」を表現するのに「マスホノス、キ」の章段と「キデノ山ブキ并カワツ」の章段を別々に捉えることは出来ない。「マスホノス、キ」の章段の後には必ず「キデノ山ブキ并カワツ」の章段を置くべきである。ここには、「無名抄」において「すき」を表現する長明の編纂意図が窺えるのである。

次に『発心集』において登蓮が登場する場面を見てみたい。

蓮花城、入水ノ事 入水ノ時後梅シテ、物怪ニ成テ来事 (第三卷一八)

近キ比、蓮花城ト云、人ニ知レタル聖リ在。登蓮法師相知テ、

事ニ触テ情ヲカケツ、過ケル程二、年来有テ、此聖リ云ケル様、

今八年二副ツ、身モ弱ク成リヌレバ、死期ノ近付ク事、不可疑。終リ正念ニシテマカリ隠シコト、極ル望ニテ侍ル。心ノ澄ヌル時、入水ヲシテ終ント思ヒ侍ルト、云フ。登蓮ト云人、聞驚テ、有ベキ事ニ非ズ。今一日也トモ念仏ノ功ヲ積ントコソ願ルベキニ、サヤウノ行ハ、愚チ極レル人ノスル事也ト、言葉ヲ尽シテ諫メケレドモ、更ニ不用。思ヒ堅メタル躰ト見ヘケレバ、カホドニ思ヒ取ラレタランニ至リテハ、力ナク、留ルニ不及バ。サルベキニコソ有ラメト、云テ、其用意ナドヲ力ヲ合テ沙汰シケリ。

終ニ桂河ノ深キ所ニ至テ、念仏高ラカニ唱ヘツ、水ノ底ニ沈ヌ。其時キ、聞及人、市ノ如ク集テ、且ハ貴ミ、且ハ悲ム事限り無シ。登蓮ハ、殊ニ年来見馴タル物ヲト哀ニ覺テ、涙ヲ押ヘテ帰ケリ。

角テ日来経ル程ニ、登蓮物ノ怪ガマシキ病ヲス。(後略)

この話は鎌倉時代後期に成立したとされる歴史書である『百鍊抄』の、安元二年(一一七六)八月十五日の条に、「十五日。上人十一人入水。其中稱連華浄上人爲發起。」と載っており、事実であることが明らかである。

『発心集』の「蓮花城、入水ノ事」を記した長明の登蓮への感情を探ってみると、この章段は、前半で蓮花城の入水事件に登蓮を登場させ、後半では仏天の護持について述べ、「心は心として浅く、仏天の護持をたのむは、危ふき事なり」としている。この章段で長明が強調し

て述べたかった事柄は後半部分であり、前半部分は後半部分を引き出すための導入話にすぎない。そうすると、前半の入水話の登場人物は特に大きな意味を持たないと考えることが出来る。しかし、あえて長明はこの話に登蓮を登場させている。このあたりからも、長明がいかに登蓮を自身が重んじている現地へ訪れるという事を実践している「すぎもの」と特別視し、「すぎもの」として完全に認めて、尊敬の念を抱いていたゆえに『発心集』にも登蓮を登場させていたということ、窺い知ることができるのである。

六、顕昭の登蓮観

『無名抄』や『発心集』の登蓮が登場する場面の文脈を見る限り、長明の登蓮に対する尊敬や憧れという特別な感情を見てとることができる。登蓮という人物は、中世当時の長明以外の人々にはどのように映っていたのであろうか。平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての歌僧である顕昭が登蓮に対して持っていたであろう感情に注目したい。

顕昭は『散木集註』『袖中抄』の中で登蓮について述べている。以下に引用する。⁸⁾

『散木集註』

薄

花薄まそほの糸をくりかけてたえずも人をまねきつるかな(四

一七)

まそほのいと、おぼつかなし。人々たづぬれど、たしかにいひきたれることなし。

登蓮といふ人、そのかみ天王寺に此の事知る人ありときゝて、わざとゆきてとぶらひき。

眞蘇芳と云ふことを略なり。承和菊を略してそが菊と云ふがごとし。

薄のほは蘇芳色なれば如此よめるなりと云々。經盛卿云、まそと云ふ芋あり。

色の黄ばみたるなり。薄のほはいづるはじめ、件の芋の色に相似云々。

或人云、黄色といひつべし。萬葉云、まがねふくにふのまそほの色にいでてと讀り。

このまがねをば眞金といひて、金篇に類聚萬葉には入れたり。然ばまそほの色をば黄色と可得意歟。顯昭云、まがねふくきび

の中山と云ふ歌につきて鐵とのみいひ傳へたり。金をいふべからず。金を眞がねといふ事ぞおぼつかなき。

而萬葉歌は、にふは播磨の所名なり。然ば彼所のまそと云ふ歟。まその色さらにまがねの色によるべからず。まそは芋なり。

夫を糸といはむ事ぞおぼつかなきに、或人云、あなかのものは糸をまそといふと云々。

其の事まことならば薄のほの糸に似たれば、

糸をよりかけてまねくとぞよみたるにもやあらむ。

和歌の難義といふは、日本紀、萬葉、三代集、諸家集、伊勢・大和兩物語、諸家歌合、神樂、催馬樂、風俗等の詞などにある

詞をぞ、むねと尋ね勘ふることにてあるに、このまそほの糸は件等書にまたく見えず。

たゞ俊頼計よみたれば、とてもかくてもありぬべし。非大事歟。

『散木集註』は、顯昭が寿永二(一一八三)年十月七日に、守覚法親王に奉つたものであるから、長明の『無名抄』よりも時期が早く、顯昭は長明よりも前に登蓮の話を記したことになる。また、内容を見てみると、顯昭は登蓮について「登蓮といふ人、そのかみ天王寺に此の事知る人ありときゝて、わざとゆきてとぶらひき」と紹介し、登蓮が手に入れた「まそほ」の内容について述べ、最後に「俊頼計よみたれば、とてもかくてもありぬべし。非大事歟」としており、「マスホノス、キ」という歌語の解釈を長明のように大切に扱っていないように思われ、それは顯昭の登蓮に対する感情とも理解できる。ゆえに、顯昭は登蓮が雨の中を走り出して手に入れたというマスホノス、キに関する知識を、長明とは違つてあまり重要視していないようである。長明はマスホノス、キの歌語を用いて和歌を三首詠んでいるが、顯昭はそのようなことはせず、『散木集註』に「非大事歟」と記したのみである。

また、顯昭は「袖中抄」における「もすの草ぐき」や「かひやがした」

で登蓮について述べている。以下に引用する。⁹⁾

「もずの草ぐき」

又童蒙抄につきて、もずの草ぐきといひては其事なし。いづれの野にてもありぬべし。況もずのみみはらは河内也。山代といへる、如何。又登蓮法師この義申侍しかど、人もちるず侍き。

ここで顕昭は「登蓮法師この義申侍しかど、人もちるず侍き」と、登蓮の所説が認められていないことを指摘している。

「かひやがした」

登蓮法師云、常陸國の風土記に、あさくひろきを澤と云、ふかくせばきをかひ屋と云とみえたりと申侍しかど、彼風土記未見はおぼつかなし。大様は人おどし事歟。又登蓮法師は、かひやとは水の下のあるをいへば、かひやがしたにをしぞなくなる
と人の詠たるは僻事也と申き。兎角云て一すぢならぬは不實の事歟。

ここでも、顕昭は登蓮の所説について「彼風土記未見はおぼつかなし」「兎角云て一すぢならぬは不實の事歟」などと手厳しい表現であり、とても登蓮を認めているようには見えない。さらに顕昭は「つゝ、るつのゐづゝ」でも登蓮に触れている。

つゝ、るつのゐづゝにかけしまろがたけすぎにけらしも君見ざるまに

顕昭云、つゝ、るつのゐづゝとは、世の常の本如此。而或証本を見給へしかば、つゝ、るづゝゐづゝとなむ書きて侍し。それこそいはれたれ。ゐづゝといはむ料につゝゐづゝといひけるなり。つゝ、るつのといはるは心得られず。是故に、登蓮法師はつゝ、ゐへのあるべきを、へ文字つ文字相似故書たがへたるなり。あしべをさしてたづ鳴きわたるといふ赤人が歌をも、あしづをさしてなど心得ぬ女などは詠むことあり。それも相似もじなれば書きたがへたるなり。其義いはれず。つゝ、ゐの辺のゐづゝといふべからず。又或人は、つゝ、ゐといふ事につ文字を一つ書き添へたり。つといふ文字はやすめ詞なり。かみつなかつしもつおきつなどいふがごとし。さてつゝ、ゐつといふに、文字の足らねば、つゝ、ゐつのと、の文字を加へたるなりといふ人侍り。それも心得られず。あまりに任意なる義なり。

又或抄物に、まろがたけとは水くむ桶なりといへり。かみをかたにかくるは、かたぐといふなり。さればかのをけに寄せて、かみをかたげといふなり。此義心得られず。ゐつゝにかけしまろが長といふなり。桶をまろがたけといはゞ、又かみを肩にかくるを、かたげとのぶべからず。よしなし〜。

この話でも登蓮を「登蓮法師はつゝ、ゐへのあるべきを、へ文字

つ文字相似故書たがへたるなり」と、文字の書き違いをしたとして
良くは思っておらず、『散木集註』『袖中抄』のどの話を見ても登蓮
に対しては批判めいた表現なのである。

顕昭の生没年は平安時代末期から鎌倉時代初期(大治五(一二三〇)
年頃か承元元(一二〇九)年頃か)とされており、長明と同様に
顕昭も登蓮と同時期に生存している。顕昭は登蓮の「すき」話を耳
にして、自身の著書にて紹介はしたものの、長明が持っているよう
な登蓮への尊敬の念は持ち合わせていないように思える。

顕昭の著書『散木集註』『袖中抄』に「すき」という言葉は用いら
れていないので顕昭の「すき観」を探ることは難しいが、前述した、
顕昭の兄である清輔は著書『袋草紙』の中で「すき」を「嗚呼」と
表現している。顕昭の『散木集註』や『袖中抄』の登蓮に関する記
述を考えれば顕昭も清輔と同じように「すき」を「嗚呼」に近いも
のと考えていた可能性もなくはないであろう。とすると、登蓮のこ
とを常軌を逸した「嗚呼」と認識していた可能性も考えられるので
ある。

七. おわりに

以上、長明の「すき観」をめぐり、『無名抄』を中心に『方丈記』『発
心集』の「すき観」、長明が「すきもの」登蓮に寄せる感情、そして
長明がいかに歌語「マスホノス、キ」を「すき」の一部として大切
に受け止めていたか、さらに、同時代に存在した顕昭が「すきもの」

登蓮に対して感じていたであろう長明とは違う想いを考察してきた
わけだが、それらをとおして、長明がいかに実際に現地に足を運ぶ
ということにこだわる姿勢こそが長明の思う「すき」であったので
はないかということを明らかにした。そして、長明の「すき観」を
如実に表現していた書は『無名抄』であり、登蓮の経験談をとおし
て「すき」を表現している「マスホノス、キ」「キデノ山ブキ并カワヅ」
までの一つの流れの中に長明の「すき観」は宿っているのだといえ
よう。

注

(1) 李貞熹「『すき』概念の展開」(『お茶の水大学第五回日本文化
学研究会発表要旨』一九九三年六月)

(2) 『夫木和歌抄』(巻第一一・秋部二)(『新編国歌大観 第二巻』
角川書店 一九八四年)

(3) 「よしの山をへの花や咲きぬらんまつをばおきてかかる白雲」
(『月詣和歌集・巻第二・二月(附別部)・登蓮・二一六』(『新
編国歌大観 第二巻』注2書)

(4) 『平家物語大辞典』(東京書籍 二〇一〇年)

ちなみに、顕昭と登蓮は『太皇太后宮亮平経盛朝臣歌合』(第
八番・草花)で対戦している。

『左・顕昭・持』鶉(うずら)なく 遠里小野の 小萩原 心

なき身も 過うかりけり

〔右・登蓮〕秋の野の 花に心を 染しより くさかや姫も
あはれとぞ思ふ

左、小萩原をよまば、宮城野などぞ言はまほしき。右「くさ
かや姫」は、日本紀に侍事にや。此紀には、伊弉諾(いざなぎ
の)尊(みこと)・伊弉冉(いざなみの)尊(みこと)みとの
まぐはひして、先づ國土秋津洲を生むべきに、諸國山河海を生
む、草木を生むと侍る。いはゆる木租草野姫なり。歌の心はた
がはねど、「くさかや姫」と續きたる、おぼつかなし。かゝる
事は本文をたがへてこそ詠むべけれ。日本紀竟宴歌にも「年ご
との春や昔のかやの姫」とこそ詠め。たゞし、かやうの事は確
かに見る所ありてぞ詠まれたらんと思ひ侍れば、をとりまさり
申がたし。

〔新編国歌大観 第五卷〕角川書店 一九八七年

(5) 木村健「終末期のすきもの登蓮法師」〔國學院雜誌〕一九七六
年四月)

(6) 紙宏行「歌林苑の歌学論議―登蓮法師の逸話から―」〔文教大
学国文〕二〇一〇年三月)

(7) 『新訂増補國史大系』(吉川弘文館 一九八四年)

(8) 『日本歌学大系 別卷四』(風間書房 一九八〇年)

(9) 『歌論歌学集成 第四卷』(三弥井書店 二〇〇〇年)